

遺族会が団結旅行

15年の歴史を刻む

—裁判勝利へ団結—



災害から20年を過ぎて、それぞれが歳をとり、体をいためる人も多くなったが、1年に1回の遺族同志のふれあいを楽しみに集った。報告をふくめたあいさつに立つ本多弁護士。

遺族会としては、年間の大きな行事として毎年一月二十日以降の日曜日団結旅行を取り組んでまいりましたが、今年は春に実施することになりました。

三川鉱山災害の遺族が一堂に集まり、語り合い団結するために、昭和四十年から三川集会所ではじ

め、その後山原などでも開きましたが、四十四年から立願寺温泉、途中で五十一年にはら金館、そして山鹿の保養センターに三年、五留米のバーサイドパレスで開き、十五年は郷野温泉、五十六年から十五年は菊池温泉の城山荘と、荒尾、福岡県・熊本県内から四十

三人と来賓六人です。第一部は総会。三池炭鉱から原書記長、芳川組組長が参加、あいさつを受け、労金の代表からもあいさつがありました。井田からは本多先生が佐賀から参加されました。あいさつでは「裁判もいよいよ終盤に近づいていきます。荒木先生の証言の内容から、刑事事件の不起訴になった検察官の誤りが明らかになったし、これからは細かい詰めをしながら英知を集めて勝利まで頑張ろう」と力強く述べられました。

三月二十六日、三川鉱山じん肺患者の古賀博文さん(熊本大学病院入院)の奥さん、古賀ヒロエさんが倒れてから十一日目に意識不明のまま、五十八歳で亡くなりました。古賀さんの奥さん、古賀ヒロエさんが倒れてから十一日目に意識不明のまま、五十八歳で亡くなりました。古賀さんの奥さん、古賀ヒロエさんが倒れてから十一日目に意識不明のまま、五十八歳で亡くなりました。



在りし日の古賀さん(右)

古賀さん(右)は、三月十五日夜、突然倒れ、意識不明のまま荒尾市民病院に救出された。古賀さん(右)は、三月十五日夜、突然倒れ、意識不明のまま荒尾市民病院に救出された。

三池炭鉱の歴史の中から

知恩社説教場

十六分会 武松輝男

「西南戦役のときは、そりゃあ大騒動じゃった。そんな時一番きつかに会ったのは、百姓じゃった。安か金で米の徴発はあつた。戦争の道具は運搬する人夫の供給に割り当てられる。

その大騒動の中で、百姓がいろいろと良か目に会ったつがあつた。それは、間部(炭鉱で石炭を採掘する)するよりも、西南戦役に入夫に徴用された方が、ちいっと賃銭が高かつた。間部をせんでよかなら、そりゃあその方がよかんで、そりに有り金にありつても

がでないとこの前提で三池炭鉱にどうして、やはり気にかかるところであつた。

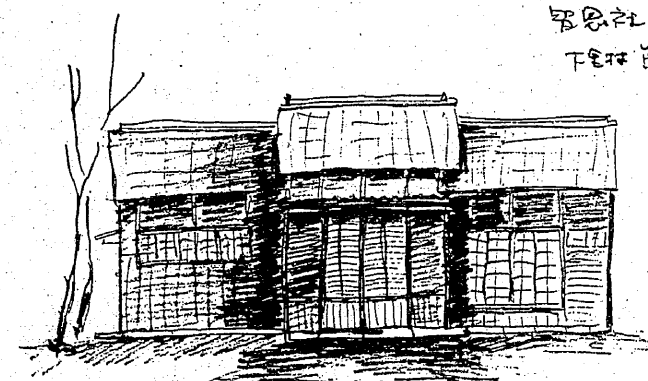
その損得と駆け引きは、いま私たちが聞き出すような巧妙なものではなつて、もうと素朴で稚拙なものであつた。それでもその素朴で稚拙な損得と駆け引きを聞き出すのが「知恩社」であつた。

西南の戦役が終わつたあとの明治十四年、大浦坑で囚徒坑夫脱走

事件がおきたのも、その風紋のせいではなかつたか。脱走に成功した囚徒の一人は、名前を変えて、東京に出て司法官になった。そして任地の九州で昔の同罪人と会い、脱走が発覚、裁判官を罷免になるといふ奇妙な運命をたどつていく。

風紋の拡大波及は、三池炭鉱の存亡にもかかわるものであるからなつた。目に見えないうらみその芽を摘みとつておかないとならな。

「知恩社」は明治十六年一月、当時の工部省三池炭鉱局長・小林秀知の手で設けられるが、その設立の目的というのは、地元民(近郊の百姓たち)の教化と、石炭採



知恩社

掘の労役に送られた熊本、福岡、佐賀諸県の監獄出張所の囚徒や三池集治監囚徒の善導と事業の発展

屋はなつて、本派本願寺から教師師を招いて、各村落や監獄出張所などを巡回説教していただいたものであつた。

「知恩社」は、三池炭鉱といふ組織体だけで、寺社を形作るものではなかつた。

「知恩社」は明治十六年一月、当時の工部省三池炭鉱局長・小林秀知の手で設けられるが、その設立の目的というのは、地元民(近郊の百姓たち)の教化と、石炭採

S59年度 特休資格日数 (鉱業所関係)

操業日数	300日
三池労組スト日数	5日
スト除外基礎日数	295日
直接	207方 (70%)
間接	221方 (75%)
坑外	236方 (80%)

常にたたかいが

—じん肺会のこと—
三池じん肺会 山根重人

「この方たちと話をしてみると、組織のあることを知らなかつたが、上部組織は同一だからと勧誘されたから加入した」とのことだ。

「三池炭鉱で働くすべての労働者が労働者としての立場を堅持し、真剣に取り組まなければ、あの悲惨な有明鉱のような災害がまたまた発生することになるし、じん肺患者が必ず多発することはないと断言するに十分な理由がある。